

SLAVIC-EURASIAN RESEARCH CENTER NEWS No. 148 February 2017

新センター長から

2月1日から、センター長を務めることとなりました。センターには1989年に鈴木基金奨励研究員（現：鈴木・中村基金奨励研究員）として滞在し、また1995年には最初のCOE非常勤研究員として9ヵ月勤務いたしました。その頃には自分がこのポジションに就くことなど、想像もしていませんでした。2014年の10月に専任研究員としてセンターに着任してからは、それまでの学部教育中心の大学とは全く異なる環境の中で2年ほどばたばたと過ごしてまいりましたが、それに「慣れる」間もなく今度は全体を統括する役割を担うこととなりました。自分がこれから2年間センター長を務められるかということについては不安もあるのですが、逆にセンター長一人でものごとを動かせるわけではないので、周囲の協力も得ながら「同輩中の第一人者」というつもりでいろいろを進めていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



仙石 学

幸いなことに、センターは2015年度におこなわれた共同利用・共同拠点研究の期末評価において、最高のS評価を受けることができました。またそれにより、第3期中期計画期間(2016～2021年)においても引き続き、共同利用・共同研究拠点として活動をおこなうことが可能となりました。そこから今期においても、第2期中期計画期間からセンターの研究の軸となっている「地域間比較」と「境界研究」を主な柱として、いずれもその対象とする領域、あるいはディシプリンを広げる方向で研究活動を展開しています。期末評価で高い評価を得られたことに関しましては、日頃からセンターの研究活動にご理解・ご協力をいただいている皆様方の支援が大きいかと存じます。改めて御礼を申し上げます。

ただ他方で、私の前任校もそうでしたが、どの大学でも年々教員の講義負担や行政負担が増加していることで教員の側に余裕がなくなり、共同研究などへの参加を依頼してもお引き受けいただけないという事例が増えてきております。また現在の状況を反映してか、研究者をめざそうという院生の数も減ってきています。この「縮小再生産」的な現状を少しでも変えていくため、センターとしてはできる範囲ではありますが、今後さまざまなプロジェクトを展開し、皆様方が研究を継続するインセンティブとなるような企画を構築・拡大していくことを考えています。他方で共同利用・共同研究拠点といたしましては、いろいろお忙しいということは承知しておりますが、皆様方がセンターの主導する共同研究に積極的に関与

していただく、あるいは外からセンターを巻き込むような共同研究を構築していただくということも、非常に重要になります。どうぞ今後とも、センターの活動へのご協力のほど、よろしく願いたします。[仙石]

研究の最前線

◆ 野町素己准教授が日本学士院学術奨励賞と日本学術振興会賞をダブル受賞 ◆



ご両親、ロムアルド・フシチャ教授と。
向かって左から2人目が野町准教授

と同等以上の学術研究能力を有する者のうち、論文等の研究業績により学術上特に優れた成果をあげている研究者としています。」

野町准教授は「カシュブ語を中心とするスラヴ諸語の形態統語構造ならびにその通時的・地理的变化に関する類型論的研究」により受賞となりましたが、受賞理由については、次のように書かれています。

「カシュブ語は、ポーランド北部のポメラニア地方で話され、ユネスコが認める消滅危機言語のひとつであるが、これまでその音声学・音韻論、形態論、語彙研究に比して、形態統語論研究は進んでいなかった。野町素己氏は、徹底したフィールドワークで収集した現代カシュブ語の資料や通時的資料とを駆使し、カシュブ語の形態統語構造の解明を飛躍的に進展させた。野町氏は、カシュブ語がドイツ語とポーランド語の両言語から受けたさまざまな地理的、通時的変化を追跡するとともに、その変化に言語類型論的に貴重な「逆行現象」が生じていることを指摘し、その主な要因の一つがポーランド語の影響である可能性を示した。

野町氏は、カシュブ語研究の方法論をルーマニア語、セルビア語、ハンガリー語との接触がみられるブルガリア語バナト方言の研究にも適用し、言語変化が生じる背景と変化の帰結を解明しつつあり、言語類型論、言語接触論、社会言語学などの諸側面において、スラヴ諸語研究の深化に大きく貢献した。」

日本学士院学術奨励賞は、25名の日本学術振興会賞受賞者のなかからさらに絞られて、わ

ずか6名が選ばれるものです。その受賞理由については、次のように書かれています。

「野町素己氏の研究テーマは、スラヴ語学であり、特に西スラヴ語群に属するカシュブ語および南スラヴ語群に属するバナト・ブルガリア語です。両言語ともに消滅危機言語に指定されており、前者は主にポーランド北部、後者は主にルーマニアとセルビアの国境地帯に少数の話者がいます。

野町氏はこれまで研究の乏しかったこの二つの言語について、優れた語学力を駆使して、これらの地域で精力的なフィールドワークをおこない、貴重な資料を収集しました。特に、形態統語論、言語類型論、言語接触論や社会言語学などの側面から、共時的・通時的に、詳細かつ精密に検討しました。

これらの研究調査の成果は、多くの論文、著書として英語、セルビア語、ロシア語やポーランド語などで公刊されています。野町氏の業績はスラヴ語学界において国際的に高い評価を得ているのみならず、広く言語学一般にも寄与するもので、今後の発展が期待されます。」[編集部]

◆ 2016年度冬期国際シンポジウム ◆

「体制転換から四半世紀：ポスト共産主義社会の多様化を再考する」 開催される

センターは12月8日(木)・9日(金)の2日間、冬期国際シンポジウム「体制転換から四半世紀：ポスト共産主義社会の多様化を再考する」を開催しました。今回はソ連およびユーゴスラビアが解体し体制転換が一段落した1991年から25年という区切りの年にあたることから、社会主義体制が解体した後の25年の間に進展したスラブ・ユーラシア諸国における「多様化」に注目し、その様相を比較することを試みました。

シンポジウムでは6つのセッションが設けられ、1日目には「体制転換の有無とドイツの境界」、「社会・政治変化の転換点とスラブ・ユーラシアにおける言語変化」、および「旧ソ連諸国における国家セクター改革の比較：ロシア、中国、インド」の3つのセッション、2日目には「ポスト共産主義社会における家族と国家」、「ユーラシアにおける腐敗と反腐敗」、および「ネオリベラリズムとその敵：ポスト共産主義国をめぐる戦い」の3つのセッションが開催され、17名の報告がおこ



家族政策のセッション



レセプションでの一コマ

なわれました（プログラムは前号参照）。今回は政治・経済・言語・境界研究と多彩な分野でのセッションを開催し、またスラブ・ユーラシア地域と他の地域との比較も含めたセッションも実施しましたが、専門領域および地域の枠を超えて、76名（うち外国人17名）方にセッションに参加していただくことができました。

今回のシンポジウムは、センターの第3期中期計画期間における共同研究の柱の一つである「地域間比較」を実践するものとして開催されました。今後もスラブ・ユーラシアの地域内の比較、およびスラブ・ユーラシアと他の地域の比較を通して、新たな研究領域の開拓や学際的な共同研究を推進していく予定です。[仙石]

◆ UBRJ : Association for Borderlands Studies (ABS) Japan Chapter ◆ が本格始動

UBRJは、アメリカを中心とする境界研究の国際学会である Association for Borderlands Studies (ABS) とこれまで緊密な連携関係を構築してまいりましたが、昨年4月にはUBRJが中心的な役割を果たし、その日本部会（Japan Chapter、略称ABSj）の設置に至りました。そして、昨年11月27日、第1回目のABSjセミナーが北海道大学東京オフィスにて開催されました。セミナー冒頭、ABS日本部会長の池直美（北大公共政策大学院）が開会の辞を述べました。次に、マルチン・カチマルスキ（センター外国人研究員）による“Sino-Russian Mutual Support in Territorial Disputes: The Cases of Crimea, and East and South China Seas”と題する報告がおこなわれました。そして、現役の入国管理実務者である君塚宏（法務省入国管理局審判課長）氏をお招きし、「日本の出入国管理行政の現状と課題について：外国人材受入れと難民問題を中心に」と題する報告を聴取しました。UBRJ ホームページには、テッド・ポイル（九大CAFS）による詳細なセミナー参加記（英語）が掲載されています。UBRJは今後もABSjと緊密な連携を維持しつつ、日本でのボーダースタディーズの発展を推進してまいります。[岩下]

◆ ワークショップ「ユーラシア地域大国と新興市場の経済と社会」の開催 ◆



ワークショップのようす

「スラブ・ユーラシア地域における『ポストネオリベラル期』の経済政策比較」などの共催で実施されたもので、ロシア・東欧・中国・インドといった地域を多面的、体系的に比較することを試みたものでした。今回はスタートアップということもあり話題提供的な報告が中心

1月21日（土）・22日（日）の2日間にわたり、ワークショップ「ユーラシア地域大国と新興市場の経済と社会」が西南学院大学で開催されました。これはセンターが現在進めている「地域間比較」のプロジェクトの一環で、科学研究費基盤研究A「ユーラシア地域大国（ロシア、中国、インド）の発展モデルの比較」（代表：田畑伸一郎）および基盤研究B「ポストネオリベラル期における新興民主主義国の経済政策」（代表：仙石学）の主催、センターの共同研究班

でしたが、今後研究会を重ねていく中で、より比較の対象や方法を体系的なものとしていくことを目標としています。今回の2日間のプログラムは、以下の通りでした。[仙石]

1月21日(土)

13:30~15:30 司会：田畑伸一郎(北海道大学)

佐藤隆広(神戸大学)「インド産業発展の軌跡と展望」

福味敦(兵庫県立大学)「Power Tariff Policy and Manufacturing Sector Productivity in India」

古田学(京都大学)「Trade Liberalization and Wage Inequality in the Indian Manufacturing Sector」

15:45~18:15 司会：上垣彰(西南学院大学)

仙石学(北海道大学)「ポーランドにおける財政規律：1997年憲法、3人の経済学者、トウスクの功罪」

小森宏美(早稲田大学)「エストニアにおけるネオリベラリズム的政策選択の要因」

服部倫卓(ロシアNIS貿易会ロシアNIS経済研究所)「ロシア鉄鋼業の特質と最新動向」

武田友加(九州大学)「ロシアの貧困と社会保護制度の効率性」

1月22日(日)

10:00~12:00 司会：仙石学(北海道大学)

佐藤嘉寿子(帝京大学)「ハンガリーの年金制度改革とその後の変遷」

松本かおり(神戸国際大学)「ロシアの医療従事者の社会的地位の変化について」

松澤祐介(西武文理大学)「チェコとスロバキアのネオリベラリズム」

13:00~15:00 司会：佐藤隆広(神戸大学)

丸川知雄(東京大学)「深圳の何が『特別』か？」

木村公一朗(アジア経済研究所)「スタートアップの増加と中国経済の変化：起業を通じた『創新』と『走出去』」

伊藤亜聖(東京大学)「デジタルドラゴンヘッド・深圳：無人航空機(ドローン)産業の事例」

◆ ヤヌシュ・シャトコフスキおよびドロタ・レンビシェフスカ両教授をお迎えして ◆

2月10日(金)に、東京大学にてポーランドのスラブ語学者二名による講演会がおこなわれました。一人目はヤヌシュ・シャトコフスキ教授(ワルシャワ大学)でした。シャトコフスキ教授は、チェコ語を中心としたスラブ語学、特に方言学の世界的な権威として著名です。

長年にわたり国際スラブスト会議全スラブ言語地図研究部会委員として活躍しています。1993~1998年には国際スラブスト会議の会長も務めておられ、現在は名誉会員になりました。今回の講演会は「ドイツ語・方言へのスラブ

諸語の影響」という題目で報告されましたが、これは教授が最も関心ある研究分野の一つです。2015年にはこれまでの研究成果をまとめた『スラブ・ドイツ言語接触研究』という大著を上梓されましたが、その内容をまとめたものでした。これは教授の15冊目の著書で、学界で当該分野で最良の書と高い評価を受けています。講演では、膨大な数のドイツ語方言辞典



向かって左からヴァチンスキ氏、シャトコフスキ教授、レンビシェフスカ教授、フシチャ教授

を網羅的に分析し、各ドイツ方言およびスラブ諸語の音韻的特徴とその通時的変化を踏まえ、借用語彙の時期や経路を厳密に分析されました。精密で論理的な分析手法と説得力ある論の展開はもとより、ご本人の現地調査にも裏付けされた豊富で興味深い多くの事例により、聴講者は圧倒されました。

二人目の講演者であるドロタ・レンビシェフスカ教授（ポーランド学士院スラブ学研究所）は、ピャウイストク周辺部など、ポーランド東部における東スラブ諸方言を研究対象とし、音韻論、語彙論、地名学、言語接触論などに取り組んでいます。特にクニシン周辺の方言の通時的研究やピャウイストク周辺の東スラブ方言地図などの業績をあげてきました。また、シャトコフスキ教授同様、国際スラブリスト会議方言研究会委員も務められ、ポーランドを中心にスラブ方言学の国際会議を頻繁に組織するなど実に精力的で、ポーランドで最も生産的な中堅のスラブ学者の一人と言えます。今回の講演は「地理的に見たポーランド人の苗字」と題され、苗字に見られる方言的要素や表記の揺れ、文法的な形式、さらに苗字の由来（例えば普通名詞、地名など）から、その文化的背景と地理的な関係を明らかにすることを試みるものでした。専門外の方にも大変興味が持たれる学際的なテーマだったこともあり、質疑応答も大変充実したものになりました。

さて、2003年から2年間、私は講師としてワルシャワ大学に派遣されましたが、その時にポーランド学科や西・南スラブ学科の講義に多く通いました。中でもシャトコフスキ教授のスラブ方言学とスラブ語比較文法は大変興味深く、とにかく毎週楽しみだったのが思い出されます。とても話が上手な先生で、雑談に登場するドロシェフスキ、シュティベル、レール・スプワヴィンスキ、マレシュ、ハブラネク、イビッチといった伝説的な研究者との思い出話が印象的でした。その授業と一緒に出席していたのがレンビシェフスカ教授で、彼女は当時教授資格論文の準備をしていたころだと思います。その後、お二人とは学会で何度もお目にかかり、またご自身が組織する国際学会にも何度か招待を賜りました。今回は本邦のスラブ研究者との有意義な学術交流ができたのは無論重要なことですが、個人的には、学術的な意味においてお二人に少し恩返しができたのではないかと考えています。

なお、本講演会組織にあたり三谷恵子教授（東京大学）、ロムアルド・フシチャ教授（ワルシャワ大学）、ヤロスワフ・ヴァチンスキ氏（ポーランド広報文化センター）に大変お世話になりました。この場をお借りして、お礼申し上げます。[野町]

◆ 2017年度「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした 総合的研究」に関する公募結果 ◆

昨年度と同様に、「プロジェクト型」の共同研究、「共同利用型」の個人による研究、センターが設定した課題による「共同研究班」の班員の募集をおこないましたが、2016年12月20日の共同利用・共同研究拠点課題等審査委員会において応募者を審査した結果、以下の方々が採択されました。[岩下]

2017年度採択者一覧

1「プロジェクト型」の共同研究

	申請者氏名	所属機関・職	研究課題名
1	阿部 賢一	東京大学大学院人文社会系研究科・准教授	「シレジア」の文学史記述に関する横断的研究
2	高山 陽子	亜細亜大学国際関係学部・准教授	社会主義の記憶とノスタルジア：旧ソ連・東欧・中国・ベトナムの比較から

3	三谷 恵子	東京大学大学院人文社会系研究科・教授	中世スラヴテキスト分析の方法研究：テキスト間影響関係からのアプローチ
---	-------	--------------------	------------------------------------

2 「共同研究班」の班員

	申請者氏名	所属機関・職	テーマ
1	佐藤嘉寿子	帝京大学冲永総合研究所・助教	④スラブ・ユーラシア地域における「ポストネオリベラル期」の経済政策比較
2	醍醐 龍馬	日本学術振興会特別研究員 (DC1)	③スラブ・ユーラシア地域を中心とする境界・国境研究
3	長沼 秀幸	日本学術振興会特別研究員 (DC2)	①近現代の中央ユーラシアに関する共同研究
4	野坂(佐原)潤子	ビルケント大学経済・社会科学部大学院・博士課程	①近現代の中央ユーラシアに関する共同研究
5	松本かおり	神戸国際大学経済学部・准教授	④スラブ・ユーラシア地域における「ポストネオリベラル期」の経済政策比較
6	吉村 貴之	早稲田大学イスラーム地域研究機構・招聘研究員	①近現代の中央ユーラシアに関する共同研究
7	ヨフコバ四位エレオノラ	富山大学大学院医学薬学研究部・教授	②スラブ・ユーラシアにおける言語接触・言語圏に関する共同研究

3 「共同利用型」の個人による研究

	申請者氏名	所属機関・職	研究課題名
1	梅村 博昭	元東京農業大学生物産業学部・講師	ブルガーコフ『犬の心臓』などに見られる医学的「若返り」の文化的意義
2	金沢 友緒	日本学術振興会特別研究員 (PD)	18世紀後半における自然科学とそれに対するロシア知識人達の理解：作品・書簡・公文書の調査と考察
3	櫻間 瑛	日本学術振興会特別研究員 (PD)	タタルスタン共和国による在外タタールの文化振興：ロシアの文化外交との関連から
4	塩谷 哲史	筑波大学人文社会系・助教	1850-60年代ロシア帝国のアジア外交：N.P. イグナチエフの活動を中心に
5	野部 公一	専修大学経済学部・教授	ロシアにおける処女地開拓の再検討（1954～1964年）
6	白村 直也	内閣府日本学術会議事務局・学術調査員	「チェルノブイリ法」の運用をめぐる旧ソ連各国の比較研究：福祉と医療における体制整備
7	藤田 智子	なし	マルク・シャガールとアブラム・エフロス
8	前田 しほ	人間文化研究機構・研究員	ソヴィエト文学と戦争記憶：ラスプーチンとアイトマートフを中心に
9	村知 稔三	青山学院女子短期大学子ども学科・教授	現代ロシアにおける子どもの権利擁護の実態と課題

◆ 専任研究員セミナー ◆

12月～1月にかけて、専任研究員セミナーが以下のように開催されました。

12月5日：長縄宣博 『『イスラームのロシア：帝国、宗教、公共圏 1905-1917』から序章、第1章、終章』
コメンテータ：橋本伸也（関西学院大学）

今回提出された3本のペーパーは、長縄氏の待望の単著書の一部でした。本書は博士論文を土台とし、その後の研究を反映させ大幅に改めたものです。帝政ロシアのヨーロッパ部東部におけるタタール語の出版、村落・都市の街区レベルのムスリムの暮らし、ロシア正教徒との関係などについて、数多くの一次史料と豊富な先行研究の批判的な読みに基づき丁寧に分析し、当時のムスリムがロシア市民として統合しえたのか否かという問いに答えることを目的としています。終章は、現代ロシアの理解も照準に含まれています。長縄氏の分析は概ね非常に高く評価されましたが、様々な分野で用いられる「公共圏」の概念と必ずしも馴染まない部分があること、とりわけ帝政ロシアではなぜ宗派的な単位で公共圏が成立せざるをえなかったのか、という疑問が出されました。[野町]

1月24日:岩下明裕「ボーダースタディーズへの招待」「構築される領土:竹島、尖閣、北方領土」
コメンテーター:木村崇(京都大学名誉教授)

今回の2本のペーパーは岩下氏が2015年に刊行した著書『入門・国境学』(中公新書)のエッセンスとも言えるもので、ボーダースタディーズと日本の領土問題に関して、普段このような議論に接することがない読者を対象に、現状を平易に説明することを試みたものです。ペーパーとあわせて、西日本新聞において50回にわたり連載された随筆「世界はボーダフル」も提出されました。コメンテーターの木村氏は、「岩下ボーダー学」の特徴を「国境問題に関するリテラシーの涵養」、「ボーダースタディーズの視点からの国境概念の再構築」、そして「問題認識から変革を目指す姿勢」という3点にまとめた上で、それらの視点が有機的に組み合わされているペーパーおよび随筆を高く評価されました。出席者からはポジティブイズムとコンストラクティブイズムの関係や、国境・ボーダー研究のあり方、あるいはボーダースタディーズの今後のあり方などについての議論が提起されました。[仙石]

◆ 2017年度鈴川・中村基金奨励研究員募集中 ◆

鈴川・中村基金の奨励研究員制度は、鈴川正久氏と中村泰三氏からのご寄付を活用して、大学院で学ぶ方々にセンターの施設や人材をご利用いただくことを主旨としたものです。この制度を利用して、これまでに多くの大学院生がスラブ・ユーラシア研究センターに滞在し、センターおよび北大附属図書館の文献資料の利用、センターで開催されるシンポジウム・研究会への参加、センターのスタッフとの意見交換をおこない、実りのある成果を挙げてきました。

2017年度も昨年同様に募集をおこないます。募集人数は若干名とし、助成対象者は原則として博士後期課程の大学院生です。助成期間は1週間以上3週間以内です。滞在期間は、原則として2017年7月から2018年2月の間。センターの行事をご勘案の上、時期と期間を選んで応募してください。最終的な日程の調整は、採用後ホスト教員とおこなうことになります。滞在中に一度、自身の研究について発表することが義務づけられます。公募締め切りは4月末、選考は5月中におこなわれ、結果が通知されます。募集要項・応募用紙はセンターのホームページで参照およびダウンロードできます。ふるってご応募ください。[家田]

<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/applications/index4.html>

◆ 研究会活動 ◆

ニュース147号以降、センターでおこなわれた諸研究会活動は以下の通りです。[大須賀]

11月23日 中澤拓哉(東京大・院)「社会主義期モンテネグロにおける歴史叙述と『公共の歴史』(1945-1990)」(鈴川・中村基金奨励研究員報告会)

- 11月26日 櫻間瑛（日本学術振興会特別研究員）「正しいタートル＝イスラームを巡って：ボルガル遺跡の過去と現在」；中村瑞希（筑波大・院）「現代タートル・ディアスポラの言語選択：タシケントとアスタナのタートル人の事例から」（北海道中央ユーラシア研究会）
- 12月1日 アリベイ・ママドフ（北大・文・院）「スリランカにおける内戦・戦後のとらえ方：知識人への調査から」（北海道中央ユーラシア研究会）
- 12月2日 第19回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会 長縄宣博（センター）「クリミア・タートル人：その過去と現在」
- 12月20日 公募研究「共同研究班」報告会 笹原健（麗澤大）「民族的アイデンティティから見たソルブ人とソルブ語：上ソルブ語における文末表現と対応するドイツ語表現を対照して」；花松泰倫（九州大）、高田善博（北海道国際交流・協力総合センター）「ボーダーツーリズムが境域社会に及ぼす経済的・文化的影響と〈境界〉の意味・機能の変化」；仙石学（センター）「新興民主主義国のネオリベラリズムを比較する」
- 1月27日 林忠行（京都女子大）「チェコスロヴァキア軍団とロシア革命：百年の時をへだてて」（北海道スラブ研究会）
- 1月28日 財政規律規範の形成と政策移転・欧州化比較研究会 仙石学（センター）「ポーランドにおける財政規律：1997年憲法、バルカンカー、トウスクの功罪」；森井裕一（東京大）「ドイツにおける財政規律と欧州化：歴史、連邦制度改革、欧州化」；八谷まち子（九州大）「EU財政指令改正案」
- 1月30日 SRC/IREEES（ソウル大学ロシア東欧ユーラシア研究所）ジョイント・シンポジウム “Otherness in Russian and Eurasian Contexts” Kim, Yonni（ソウル大、韓国）“A Study of Nabokov’s Triadic List”；Hwang, Chul Hyun（同）“A Semantic Analysis of Loanword Adaptation in Russian: A Case of Russian Suffixes *čik, ščik, nik, ik*”；Jeong, Tae Jong（同）“Natasha: Is She ‘the Other’ in the Chekhov’s Play *The Three Sisters*?”；生熊源一（北大・文・院）“Objects as Others? Breathing Exercises in Works of A. V. Monastyrsky and the Collective Actions group”；Lee, Sun-Woo（大邱慶北科学技術院、韓国）“A Subtle Difference between Russia and China’s Stances toward the Korean Peninsula and Its Strategic Implications for South Korea”；菊田悠（センター）“Four Types of Migrants from Uzbekistan to Russia: Specifying Sources of ‘Otherness’”；Cho, Kyoo Yun（ソウル大、韓国）“Visualization of ‘Own’ and ‘Alien’: Book of V. Mayakovskiy as Poetic Genre”；神竹喜重子（センター）“Sergei Prokofiev’s Impact on Japanese Music”；Byun, Hyun-Tae（ソウル大、韓国）“Toward Materialistic Esthetics: Evolution of Russian Avant-garde”；Elmira Alexandrova（ロシア文学研究所、ロシア）“‘An Evening with Claire’ by Gaito Gazdanov as a Novel-Reminiscence: From Commentaries on Certain Images of Acoustic Memory”
- 2月3日 門間卓也（東京大・院）「ウスタシャ運動を通じたクロアチア民族国家像の再編成」（鈴川・中村基金奨励研究員報告会）
- 2月7日 Stephen Wheatcroft（メルボルン大、オーストラリア／センター）“The Rise, Fall and Subsequent Partial Resurrection of the Soviet/Zemstvo Statistical Idea, 1917-59”（センターセミナー）

人事の動き

◆ 助教の就任 ◆

昨年9月1日をもって、高橋美野梨さんがセンター助教に就任されました。

高橋さんは筑波大学大学院人文社会科学研究科で国際政治経済学を専攻して博士号を取得した後、センターに活動の場を移し、2012年度から3年間、日本学術振興会特別研究員、2015年度からはセンターの学術研究員を務められました。グリーンランドを研究対象地域とし、博士論文をまとめた『自己決定権をめぐる政治学：デンマーク領グリーンランドにおける「対外的自治」』（明石書店、2013年）はいくつかの学会賞を取るなど高く評価されています。国際連携研究教育局（GI-CoRE）「北極域研究グローバルステーション」にも配置され、北極域研究センターの教員も兼務しており、北極域研究での活躍が期待されています。[田畑]

カラスとカエルと私：札幌での夏

ポヤン・ベリッチ（ワシントン大学／センター 2016 年度特任准教授）



筆者：友人の自転車を乗り回して有頂天

もし6月半ばに札幌を訪れたことがなければ、きちょうめんな人びとが整然と積み上げたごみ袋の山が、無法者のカラスに毎度のこと襲われている様子を目撃することはありません。彼らは時に自分のクチバシと爪をきちょうめんな人びとの方へと向けさせます。そして6月半ばに札幌の北海道大学のキャンパスの北端の馬術場と農場と、通りをはさんだ宿舎に住む機会が無かったなら、眠り知らずのカエルの合唱を耳にしつつ眠りにつくという経験をするのではないでしょう。彼らは農場の境である用水路から伸びている笹藪に潜んでいるのです。2016年、私は光栄にも北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター（SRC）に招かれ、外国人研究員として札幌で2ヵ月を過ごし、この地で6月15日から8月15日にわたって生活し、仕事をしました。私は攻撃してくるカラスを目の当たりにし、潜んでいるカエルの声を耳にし、それらが大好きでした。

2016年に札幌に来るより前は、2015年2月にこの街を訪れたことがありました。私はスロヴァキア語とカシュブ語に関する発表をSRCにおいて拝聴し、また私自身の発表もしました。また、札幌雪祭りを見学し、有名な札幌ビアガーデンで食事をしました。私の2度目の滞在は夏の札幌を体験する機会となったのです。職場に向かった最初の日は、ポプラの綿毛に迎えられ、美しいキャンパスに足を踏み入れました。同時にこのポプラ並木は6月下旬の雨と7月の容赦ない日光から健気にも私を守ってくれたものでもありました。その同じ日に、私は蓮で覆われた大野池のそばを歩いたのですが、この池は祖父母と一緒に子ども、ノートを手にした学生、カメラを手にもふらりと立寄った旅行者を心地よく迎えていました。やがてSRCに着いて私が真っ先に会いに行った人は、それまで郵便やメールでやり取りしていた大須賀さんでした。着いてからも何かと世話をしてくれました。メールではなく、対面で。数日のうちにSRCの事務職員はもちろん、ほとんどの教員とも知り合いました。しかも私の気まぐれを喜んで叶えようと、親切にも田形さん、中嶋さん、野町さんは、7月30日の北海道日本ハムファイターズの試合の切符を手配し、また一緒に行ってくれました。このわずかな日数で早々に悟ったのは、8月の中頃に、全てを後にして去ることは容易ではないということで、実際その通りでした。

私は、スラブのマジョリティー及びマイノリティーの言語に関する様々なテーマに関して、共同研究者である野町さんとの研究を一層推進する予定でSRCに来ました。2ヵ月の期間に、野町さんと私は早稲田大学にて、敬愛する長興先生のもとを訪れたり、京都大学で過去のセルボ・クロアチア語の状況に関する最新の研究成果について発表したり、野町さんと共同で組織した国際シンポジウム「スラブ諸国における標準語イデオロギー」のためにヨーロッパ、北アメリカ、ニュージーランド、日本の高名な研究者を札幌に招待したりという機会に恵まれました。2ヵ月の間に私がSRCで達成できた全ての仕事を通じて確信するようになったの

は、外国人研究員制度が旧ソ連・東欧をテーマにする外国人研究者が札幌に滞在するにあたって、非常によく考えられた制度であるということです。というのも自分と似た関心を持つ日本の研究者との距離の近さを利用できるのはもちろん、様々な研究プロジェクトに関心を注ぐことが可能であるからです。

SRCの快適な空間で、私が続けてきたセルビア北部のブニェヴァツ人コミュニティの言語問題に関する研究を楽しみました。これはシンポジウムでの「ブニェヴァツ人の中のブニェヴァツ語：ブニェヴァツ語疑問文の5W1H」と冠したペーパーの発表として結実しました。同シンポジウムで、私は「標準なき標準語イデオロギー？今日のセルビアにおける多様な標準語（セルビア語）観」というペーパーを発表しました。これは私が進めている「標準語」という一般概念および「標準セルビア語」という特殊概念の研究から生まれたものです。また京都大学で「かつてセルボ・クロアチア語が話されていたところ：旧ユーゴスラビア諸国における言語名の急増」という題で発表するために準備していたので、「言語コミュニケーション性」という人類哲学的な概念を詳しく話すこともできました。今回の日本滞在のおかげで、2014年に初めて日本を訪れてから親しく連絡をとっていた早稲田大学の長與先生との交流を再度楽しむことができました。彼から頂いた実り多く広汎かつ豊富なアドバイスには心から感謝しています。同様に東京大学の三谷先生、北海道大学の橋本先生とも再会できました。事実、これら全てはSRCの外国人研究員制度のおかげで叶ったのです。

札幌の夏を経験する機会がなければ、私が体験したように襲ってくるカラスを見たり、隠れたカエルの鳴き声を聞いたりすることはありません。2016年の夏の私のように活気みなぎる札幌に来なければ、心を開いて受け入れてくれる沢山の札幌の人々と知り合う喜びを得られません。北大近くにある粋なイタリアン・レストラン *Sopracciglia* で知り合った素晴らしい友人たちとの交流も続いています。SRCの外国人研究員制度がもたらす可能性をまだ考えたことがない方は、兎にも角にもすぐに検討すべきでしょう。

(英語から上村正之訳)

日本におけるヨーロッパ研究者

パヴォル・バボシュ（コメンスキー大学／センター 2016年度特任准教授）

2015年の10月、私はスラブ・ユーラシア研究センターの外国人研究員プログラムに応募した。ちょうどその頃、私はポスト社会主義国において、なぜ民主主義が失敗しつつあるのかという問題についてのアイデアを膨らませていたところであるが、自分の研究を進めるためにふさわしい場所の一つとして、中東欧の専門家も所属するセンターを勧められたことも、今回このプログラムに応募した理由の一つである。

私が書類を提出した直後に、ポーランドにおいて議会選挙が実施された。選挙では「法と正義」が勝利し、その結果としてポーランドのリベラル民主主義の基盤が崩されることとなった〔訳注1〕。そして私が日本に行くまでの間には、自分の母国であるスロヴァ



筆者

1 法と正義：カチンスキ兄弟らを中心として2001年に形成された、保守ナショナリズムで反リベラル、反エリート指向の強い政党。

キアにおいて議会選挙が実施され、複数の極右政党、中にはファシスト政党とでも呼べるような政党が議席を獲得することとなった。この一連の事態は、新たな研究を進める刺激となるものであった。

日本にいるということは、仕事を進める上で大きな助けとなった。客員研究員として滞在するという事は、組織行政や教育の義務から解放されるということの意味を意味して、その分の時間を研究に時間を割くことができる。また日本でヨーロッパ研究者をしているということは、(本国から)7時間から8時間の時差のある世界に存在しているということになり、通常であれば研究の妨げとなる近代的なコミュニケーション技術によって研究を邪魔されないということも意味している。端的に言えば、勤務時間中に電話はならないし、e-mailの着信音がなり続けるということもない。

センターの研究環境は、期待を上回るものであった。資金が足りないために当然あるべき資料さえ整備されていない東欧の国公立大学の図書館とは異なり、センターの図書館は十分な資料を所蔵している。また幸いなことに、センターの研究者や他の客員研究員と自分の研究について議論し、自分のアイデアをさらに深めることができた。そしてもっとも有益だったのは、センターが組織ないし共催した各種のイベントであった。自分も客員研究員として、早稲田大学で開催されたセミナーで報告し、またヨーロッパのポスト社会主義をテーマとしたセンターの(冬期)シンポジウムのパネルに参加した。これらのイベントにおいて、私のアイデアおよび研究に関して多くの同僚から専門家としての意見を受けたが、それらは疑いなくポスト社会主義の問題を理解することに貢献するものであった。

ここでポスト社会主義ヨーロッパの大きな問題について、簡単に触れておくこととしたい。一言で言えばそれは、「リベラル民主主義から非リベラル民主主義への逸脱」である。ヴィシエグラード4カ国のうち3カ国において、ここ数年の間に単一の政党による政権が成立した〔訳注2〕。ハンガリーとポーランドでは、その政党は今でも政権の座にある。このようなことはアメリカ合衆国やイギリスではよくあることかもしれないが、中東欧においてこのようなことが起こるのは珍しい。中東欧諸国は比例代表制の選挙制度と社会構造の多様性ゆえに、政党システムは多党化しそのため連立政権が形成されるというのが一般的である。だがひとたび政権を取ると、連立政権を形成した政党は自分たちの立場を強めるために、さまざまな機関に干渉しようとする。

ハンガリーでは、オルバーン首相およびフィデスは、多かれ少なかれこれまでの政党がしてきたことを乗り越えようとしてきた〔訳注3〕。フィデスは2014年の選挙の前に、議会全体の議席を削減すると同時に小選挙区に配分される議席を増加させるという、大政党に有利となるような選挙法の改編を実施した。フィデスはまた憲法を改正し、公共放送への監督を強化した。また最近では、オルバーンに近い実業家が、ハンガリーで最も批判的な新聞である *Nepszabadsag* の印刷所を買収するということがあった。オルバーン首相自身、民主主義体制ではない体制への賛意を隠しておらず、悪名高い2014年夏のスピーチでは、民主主義とは

2 ヴィシエグラード:チェコ、ハンガリー、ポーランド、スロヴァキアの4カ国。1991年2月にハンガリー、ポーランド、および当時のチェコスロヴァキアの3カ国の大統領が、ハンガリーのヴィシエグラードにおいて今後の地域協力について話し合ったことに由来する。なお単一政党の政権が成立したもう1カ国は、2012年から16年の間スメル=社会民主主義が政権を担当していたスロヴァキア。

3 フィデス:正式名称はフィデス=ハンガリー市民同盟。当初は比較的反リベラルな路線をとっていたが、オルバーンが党首となってからは次第に反リベラル的な傾向を強め、保守ナショナリズム的な路線を取るようになっていく。

リベラル民主主義を意味するわけではないと語っている〔訳注 4〕。

ポーランドでは 2015 年 10 月の選挙で政権についた法と正義が、メディアの独立を制限する（と反対派が主張する）法律を制定した。政府はさらに、憲法裁判所の活動権限を弱めるような施策を実施し、これが憲法危機を引き起こした。法と正義の政権は選挙で勝利した直後から、15 人の判事を有する（憲法）裁判所のコントロールをめぐる対立に拘束されてきた。新政権は、前の議会が任命した 5 人の判事の就任を拒絶し、その代わりに新しい議会において選出した。さらには憲法裁判所の違憲判断について、これを（官報で）告知することを拒絶した。政府は憲法裁判所の活動に対して新たに法的な制限を課そうとしたが、これもまた違憲との判断がなされた。政府はこの決定も無視している。憲法裁判所問題に加えて、政府は公共放送の管理を国に移したが、これは国営のテレビおよびラジオ放送をコントロールするためのものとみなされている。また政府はさらに、公安・警察の人事整理も実施した〔訳注 5〕。

欧州議会における会派「自由と民主主義のヨーロッパ（ALDE）」の代表で、1999 年から 2008 年までベルギーの首相を務めたヒュー・フェルホフスタット（Guy Verhofstadt）は、ワルシャワで行われていることは単に反リベラルというだけでなく、反民主主義ということも超えていて、ポーランドが EU 加盟に際して署名した法の支配の原則にも反していると述べている〔訳注 6〕。

客員研究員としてセンターに滞在したことで、東欧のエリートが反民主主義へと向かう理由、およびそれを人々が許容する理由について、研究を進めることができた。今のところ、グローバリゼーションが影響を与えていると考えている。長年にわたってグローバル化と貿易の自由化が進められたことで、普通の人々が職をめぐる過酷な競争と、自分の生活に対する絶え間なき脅威にさらされている。そのため人々は、このような事態をもたらすような決定を行ったこれまでの政治エリートを非難し、リベラル民主主義とは相容れないプログラムを提示する、反エスタブリッシュメントの政党に投票するようになってきている。グローバリゼーションの流れをくつがえそうとするこのような動きを、我々は 2016 年にいくつかみてきたが、そのもっとも顕著なものはイギリスの国民投票であろう。グローバリゼーションの効果が人々の生活に与える影響を、政治的な態度や行動の研究に含めることが、今後も政治学が挑戦すべき課題となるであろう。

（英語から仙石訳）

4 悪名高い 2014 年夏のスピーチ：2014 年 8 月 19 日に行なわれた「汎ヨーロッパ・ピクニック 25 周年記念式典」において、オルバーンが行なったスピーチのこと。スピーチの概要は、ハンガリー政府のホームページに掲載されている（<http://www.kormany.hu/en/the-prime-minister/news/hungarians-are-freedom-fighters-says-prime-minister-orban>）。

5 公共放送の管理を国に移した：具体的には、これまで独立した組織である公共テレビ・ラジオ評議会が有していた公共テレビおよびラジオの代表、並びに監査委員会のメンバーの人事権を国（国有財産担当大臣）に移したということ。この点を含めたポーランドの近年の状況について詳しくは、訳者による「ポーランド政治の変容—リベラルからポピュリズムへ？」『西南学院大学法学論集』49 巻 2・3 合併号（2017 年）を参照。

6 ポーランドが EU 加盟に際して署名した法の支配の原則にも反している：ポーランドに限らず新規に EU に加盟する諸国は、すでに EU に加盟している諸国との間で加盟協定を締結し、そこで加盟条件などが定められることになっている。その条件は一般的に「コペンハーゲン 3 基準」と称される、政治的条件、経済的条件、および EU 法の法体系の受容の 3 条件であるが、法による統治についてはその中の政治的条件の一つに含まれている。

学 界 短 信

◆ 学会カレンダー ◆

- 2017年3月21日 2016年度日本スラヴ学研究会研究発表会 於東京大学本郷キャンパス
<https://www.jssll.org>
- 3月25-27日 2016年度日本中央アジア学会年次大会 於KKR江ノ島ニュー向洋
<http://www.jacas.jp>
- 3月31日～4月2日 BASEES (British Association for Slavonic and East European Studies) 2017 Annual Conference 於ケンブリッジ大学 <http://www.basees2017.org>
- 4月12-15日 第59回 Association for Borderlands Studies (ABS) 年次大会 於サンフランシスコ
<http://absborderlands.org/studies/annual-meetings/>
- 5月4-6日 22nd Annual ASN (Association for the Study of Nationalities) World Convention 於コロンビア大学ハリマン研究所
<http://nationalities.org/conventions/world/2017/>
- 6月3-4日 スラブ・ユーラシア研究東アジア・コンファレンス “Conflict and Harmony in Eurasia in the 21 Century: Dynamics and Aesthetics” 於ソウル
主催 The Korean Association of Slavic and East European Studies (KASEUS)
- 6月15-17日 第二回比較経済世界大会 於サンクトペテルブルク
<http://www.jaces.info/info.html>
- 6月17-18日 2017年度日本比較政治学会研究大会 於成蹊大学 <http://www.jacpnet.org>
- 6月29日～7月1日 Joint ESCAS (European Society for Central Asian Studies)-CESS (Central Eurasian Studies Society) Conference 於中央アジア・アメリカ大学 (ピシケク)
<http://www.centraleurasia.org/regional-conf>
- 7月12-19日 2017 HOPS-SRC Border Studies サマースクール 於スラブ・ユーラシア研究センター
<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/ubrij/eng/events/archives/201707/12341.html>
- 7月13-14日 スラブ・ユーラシア研究センター夏期国際シンポジウム
- 9月16-17日 第57回比較経済体制学会全国大会 於関西大学千里山キャンパス
<http://www.jaces.info/info.html>
- 10月5-8日 18th Annual Conference of the Central Eurasian Studies Society (CESS) 於ワシントン大学 (シアトル) <http://www.centraleurasia.org/annual-conf>
- 10月21-22日 2017年度ロシア・東欧学会研究大会 於一橋大学 <http://www.gakkai.ac/roto/>
- 10月27-29日 2017年度日本国際政治学会研究大会 於神戸国際会議場 <http://jair.or.jp>
- 11月9-12日 49th Annual ASEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) Convention 於シカゴ <http://www.aseees.org/convention> [編集部]

大学院だより

◆ 秋月準也さんが小田島雄志・翻訳戯曲賞を受賞 ◆

スラブ社会文化論博士課程の秋月準也さんがブルガーコフの『ゲーヤ・ペーリツのアパート』の翻訳で「第9回小田島雄志・翻訳戯曲賞」(2016年)を受賞しました。「小田島雄志・翻訳戯曲賞」は毎年優れた翻訳戯曲を提供した方を対象に小田島雄志氏本人が選考をおこないません。贈呈式は2017年1月10日におこなわれました。[長縄]

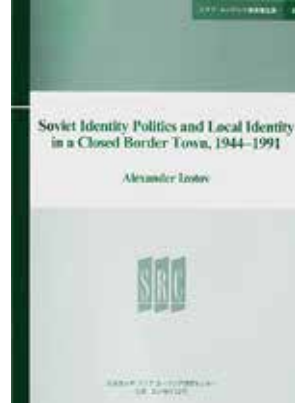
http://www.owlspot.jp/odashima_award/index.html

編集室だより

◆ スラブ・ユーラシア研究報告集 No. 8 ◆

Soviet Identity Politics and Local Identity in a Closed Border Town, 1944–1991 の刊行

今回の報告集の著者アレクサンダー・イゾトフ氏は、センターがグローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」以来、連携を続けている東フィンランド大学カレリア研究所で博士号を取得され、境界研究ユニットの様々なプロジェクトに貢献されてきた若手研究員です。そのロシアとフィンランドの境界地域の歴史を巡る研究は本ユニットが重視する国際関係研究や冷戦史研究とも関係が深く、広い意味での私たちの成果でもあり、センターが発行する「スラブ・ユーラシア研究報告集 No. 8」として、昨年 12 月に出版に至りました。報告書の解説とあわせてご一読いただければ、本報告書の位置付けやボーダースタディーズ全体の流れも分かるように編集しました。[岩下]



◆ Acta Slavica Iaponica ◆

第 38 号は編集作業を順調に進めております。論文採択率は 33% でした。海外からの投稿者が増えています。日本人の投稿は比較的控え目です。どうぞふるってご投稿ください。[野町]

◆ 『スラヴ研究』 ◆

第 64 号には 13 本の投稿がありました。現在、査読結果を基に修正稿が戻っており、編集作業を鋭意進めているところです。[長縄]

会議 (2016 年 11 月～2017 年 1 月)

◆ センター共同利用・共同研究拠点課題等審査委員会 ◆

2016 年度第 1 回 12 月 20 日 (火)

議題 1. 共同研究・共同利用公募課題の審査について

◆ センター運営委員会 ◆

2016 年度第 2 回 12 月 20 日 (火)

議題 1. スラブ・ユーラシア研究センター共同研究員の選考について

◆ センター協議委員会 ◆

2016 年度第 4 回 11 月 11 日 (金)

議題 1. 次期センター長選出について

2016 年度第 5 回 12 月 1 日 (木)

議題 1. 助教の人事について

2016年度持ち回り 12月22日(木)～1月6日(金)

議題 1. 教員の人事(岩下教授のクロスアポイントメント協定締結期間の延長)について

2016年度第6回 1月30日(月)

議題 1. 助教人事に関する選考委員会報告について
2. 研究生の受入について

[事務係]

みせらねあ

◆ 中村泰三先生のご逝去 ◆

旧ソ連・東欧地域の経済・人口地理研究の泰斗である、中村泰三先生(大阪市立大学名誉教授)が2016年12月4日に逝去されました。享年84歳でした。中村先生は、スラブ地域に関する総合的研究の振興のために、2006年にセンターにご寄付下さいました。センターでは、それまでの鈴川基金奨励研究員制度(大学院生の北大への招聘制度)の高い評価に鑑み、2006年度より鈴川基金に合わせて、鈴川・中村基金奨励研究員制度として運用しています。これに先立ち、2005年には旧ソ連・東欧地域で刊行された地理学研究書を中心とした資料1,751冊の寄贈をいただきました。これについては、「中村泰三文庫」として附属図書館に所蔵されています。

中村先生は、1957年に大阪市立大学大学院文学研究科を修了され、数年間の高等学校での勤務を経た後、1964年から1996年まで大阪市立大学文学部に勤務され、同大を退官後は大阪経済法科大学、京都女子大学でも教鞭をとられました。1992-93年度にはセンター客員教授も務められました。

中村先生のご専門は、ロシア極東から中央アジア、さらには中・東欧地域に至るまでの広大な地域(つまり、旧共産圏)を対象とした地理研究であり、行政区分や産業配置に関する地理学理論に着目する研究から、理論と実態との間にある「ずれ」を理解するための徹底的な地誌学的研究に至るまで多岐にわたっております。中央アジア地域における労働力過多といった今日の状況に繋がってくるソ連の人口問題に早くから注目されていたことも特筆されます。中村先生は、旧共産圏の経済地理について「帰納的」に実態を描くことの重要性を明示的に指摘されました。これはともすると地理的な多様性を描くだけで終わってしまいがちに思われます。しかし、それを網羅的に文字どおり「しらみつぶし」に調べ上げ、かつ、各地域の地理的な実態と旧共産圏での地理学理論との関係性をも分析されているという点で、その研究スタイルはスラブ・ユーラシア地域研究の一つのお手本を示していると言えます。また、高校地理の副読本『理解しやすい地理B [改訂版]』(文英堂、2008年)の編集・執筆など、中等教育での地理教育の発展にも尽くされました。

中村先生は多くのご著書も執筆されています。ソ連の地方での経済開発における理論と実態の齟齬についてまとめた『ソ連の地域開発』(古今書院、1985年)が最も重要な学術研究書だと思われます。また、旧ソ連・中・東欧地域の詳細な地誌について数多くの著書を出版されました。『現代のソビエト世界』(地人書房、1983年)、『東欧圏の地誌』(古今書院、1987年)、『現代ソ連白書』(古今書院、1991年)、『CIS諸国の民族・経済・社会』(古今書院、1995年)などです。昨年3月に刊行された『世界地名大辞典4 ヨーロッパ・ロシア』I～III(朝倉書店、2016年)の編集が最後のご業績となりました。

研究面だけでなく、中村先生の紳士的で優しいお人柄が偲ばれます。センタースタッフ一同、衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。[田畑/地田]

◆ 人物往来 ◆

ニュース 147 号以降のセンター訪問者（客員、道央圏を除く）は以下の通りです（敬称略）。

[田畑／大須賀]

- 11 月 21 日 中澤拓哉（東京大・院）
 11 月 26 日 櫻間瑛（日本学術振興会特別研究員）、中村瑞希（筑波大・院）
 12 月 1 日 松田哲（京都女子大）
 12 月 5 日 橋本伸也（関西学院大）
 12 月 8-9 日 Jolanta Aidukaite（リトアニア社会研究センター）、Wayles Browne（コーネル大、米国）、Dagmara Jajnesniak-Quast（ヴィアドリナ欧州大、ドイツ）、Martin Klatt（南デンマーク大）、Alexander Kupatadze（キングス・カレッジ・ロンドン、英国）、Ilya Matveev（ロシア経済・行政アカデミー）、Peter Rutland（ウエズリアン大、米国）、Dina Sharipova（キメプ大、カザフスタン）、Tomasz Wicherkiewicz（アダム・ミツケヴィッチ大、ポーランド）、浅野豊美（早稲田大）、安達祐子（上智大）、五十嵐徳子（天理大）、伊東孝之（北大名誉教授）、伊藤美和子（神戸大）、上垣彰（西南学院大）、大野成樹（旭川大）、岡奈津子（アジア経済研究所）、木村護郎クリストフ（上智大）、雲和広（一橋大）、柑本英雄（実践女子大）、金野雄五（みずほ総合研究所）、佐藤隆広（神戸大）、林忠行（京都女子大）、福田宏（愛知教育大）、福味敦（兵庫県立大）、丸川知雄（東京大）、吉井昌彦（神戸大）
 12 月 20 日 五十嵐徳子（天理大）、岩崎一郎（一橋大）、窪田順平（総合地球環境学研究所）、笹原健（麗澤大）、高倉浩樹（東北大）、月村太郎（同志社大）、豊川浩一（明治大）、中村唯史（京都大）、花松泰倫（九州大）
 1 月 16 日 梅村博昭
 1 月 25 日 白村直也（内閣府日本学術会議）
 1 月 24 日 木村崇（京大名誉教授）
 1 月 27 日 林忠行（京都女子大）
 1 月 28 日 白井陽一郎（新潟国際情報大）、勢一智子（西南学院大）、八谷まち子（九州大）、森井裕一（東京大）
 1 月 30 日 Elmira Alexandrova（ロシア文学研究所、ロシア）、Byun, Hyun-Tae（ソウル大、韓国）、Cho, Kyoo Yun（同）、Hwang, Chul Hyun（同）、Jeong, Tae Jong（同）、Kim, Yonni（同）、Lee, Sun-Woo（大邱慶北科学技術院、韓国）、門間卓也（東京大・院）
 2 月 3 日 大槻忠史（群馬大）

◆ 研究員消息 ◆

田畑伸一郎研究員は 2016 年 10 月 5～8 日の間、第 6 回日露学長会議に出席のため、ロシアに出張。10 月 31 日～11 月 3 日の間、国際シンポジウム「C/h2o/Energy Balance and Climate over the Boreal and Arctic Regions with Special Emphasis on Eastern Eurasia」への出席、研究報告及び研究打合せのため、ロシアに出張。11 月 17～22 日の間、「The 48th Annual ASEES Convention」出席及び研究報告のため、米国に出張。

宇山智彦研究員は 10 月 30 日～11 月 2 日の間、中央アジアセミナー「Central Asia on Crossroads: Interests of Global and Regional Players」出席及び研究発表のため、ロシアに出張。11 月 2～8 日の間、「中央ユーラシア学会大会」出席、研究発表及び意見交換のため、米国に出張。

家田修研究員は 11 月 6～13 日の間、「Working Group on EIA and SEA (Espoo Convention) 6th Meeting」出席のため、スイスに出張。11 月 27 日～12 月 2 日の間、Aarhus Convention and Nuclear Roundtable「Emergency Preparedness and Response to Nuclear Accidental and Post-accidental Situations (EP&R)」出席、研究発表及び研究打合せのため、ルクセンブルクに出張。

野町素己研究員は 11 月 13～25 日の間、研究打合せ、学会「ウクライナ学とスラヴ世界」出席、研究報告及び現地聞き取り調査のため、セルビア、ルーマニアに出張。

ウルフ・ディビッド研究員は 11 月 16～28 日の間、「The 48th Annual ASEES Convention」出席及び資料収集のため、米国に出張。

兔内勇津流研究員は 11 月 27～12 月 11 日の間、資料収集のため、ロシアに出張。

仙石学研究員は 12 月 21～29 日の間、資料収集のため、ドイツ、ポーランドに出張。[事務係]

目 次

新センター長から.....	1
研究の最前線	2
野町素己准教授が日本学士院学術奨励賞と日本学術振興会賞をダブル受賞／ 2016年度冬期国際シンポジウム「体制転換から四半世紀：ポスト共産主義社会 の多様化を再考する」開催される／UBRJ: Association for Borderlands Studies (ABS) Japan Chapter が本格始動／ワークショップ「ユーラシア地域大国と新興 市場の経済と社会」の開催／ヤヌシュ・シャトコフスキおよびドロタ・レン ビシェフスカ両教授をお迎えして／2017年度「スラブ・ユーラシア地域（旧 ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関する公募結果／専任研究員セミナー／ 2017年度鈴川・中村基金奨励研究員募集中／研究会活動	
人事の動き.....	9
助教の就任	
カラスとカエルと私：札幌での夏 by ボヤン・ベリッチ.....	10
日本におけるヨーロッパ研究者 by パヴォル・パボシュ.....	11
学界短信	14
学会カレンダー	
大学院だより.....	14
秋月準也さんが小田島雄志・翻訳戯曲賞を受賞	
編集室だより.....	15
スラブ・ユーラシア研究報告集 No. 8 <i>Soviet Identity Politics and Local Identity in a Closed Border Town, 1944-1991</i> の刊行／ <i>Acta Slavica Iaponica</i> / 『スラヴ研究』	
会議（2016年11月～2017年1月）.....	15
センター共同利用・共同研究拠点課題等審査委員会／センター運営委員会／セ ンター協議委員会	
みせらねあ.....	16
中村泰三先生のご逝去／人物往来／研究員消息	

2017年2月28日発行

編集責任	大須賀みか
編集協力	宇山智彦
発行者	仙石 学
発行所	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 060-0809 札幌市北区北9条西7丁目 Tel.011-706-3156、706-2388 Fax.011-706-4952 インターネットホームページ： http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/
